

## 第1項 被害状況

## 1. 八戸臨海鉄道の概要

八戸地区が昭和39年に新産業都市に指定され、臨海工業地帯における鉄道貨物輸送の増大に対応することを目的に、八戸臨海鉄道が昭和45年に設立された。

八戸貨物駅から北沼駅までの8.5kmの区間であり、平成22年度の輸送取扱量は約33万1千トンである。また、八戸貨物駅はJR貨物との共同使用駅になっている(図2.10.1)。

主要荷主は三菱製紙(株)八戸工場であり、輸送品目はパルプ、故紙等である。

また、関連事業として青い森鉄道(株)等からの業務も受託している。

## 2. 震災発生直後の状況と対応

## (1) 震災発生時の対応と列車運転状況

東日本大震災により本社及び現業機関のある八戸市は、最大震度5強の揺れがあり、地震発生後、ただちに本社に社長を本部長とする対策本部を設置し、対応にあたった。地震直後は停電、電話の不通等で被害の全体像が見えなかったが、次第に情報が入ってくるに従って、8m超とも言われる大津波が沿岸部に押し寄せたなど甚大な被害が浮き彫りになってきた。

地震発生時刻には八戸貨物駅にて発車を待っていた第17列車は、津波による被災等を免れ無事であった。

## 3. 鉄道施設等の被害(被害状況の把握)

## (1) 軌道・土木構造物

臨海鉄道線(8.5km)は八戸貨物駅より約6km付近から先の北沼駅まで2.5kmにわたり津波により被災した(図2.10.1)。踏切は7ヶ所が冠水し、踏切保安装置関係が使用不能となった(写真2.10.1)。踏切及び軌道内には多数の車や瓦礫が漂着し、一部軌道の流出もあった。



写真 2.10.1 浜名谷地 3号踏切

## (2) 駅設備

北沼駅舎及び駅構内も津波により冠水し、継電盤やフレンズ端末機等も使用不能となった。北沼駅構内には、地震発生時に列車及び車両の留置は無く、津波による被害はなかった。しかし、北沼駅構内には津波により、大量の瓦礫が漂着し、駅構内にあったコンテナが多数冠水し流された(写真2.10.2、写真2.10.3)。



写真 2.10.2 北沼駅構内



写真 2.10.3 北沼駅事務室

## (3) 車両

八戸臨海鉄道所有のディーゼル機関車及びホッパ車はいずれも、地震及び津波による冠水等を免

れ無事であった。

## 第2項 復旧に向けた取り組み

### 1. 復旧に向けた組織体制の構築

地震発生直後から、社内に「地震対策会議（本部長：田村社長）」を設置し、3月11日の第1回地震対策会議から5月13日の第16回会議まで何度も繰り返し開催した。対策会議を重ねるごとに甚大な被害の報告とそれへの対策が検討され、復旧第一に全社員が一丸となって瓦礫の処理や駅舎及び線路の復旧にあたった。

### 2. 復旧工事

#### (1) 復旧方針の策定

復旧工事にあたっては冠水した臨海鉄道線の軌道及び北沼駅構内の浮遊物の確認作業が行なわれ、その結果が地震対策会議で詳細に報告され、復旧工事の手順等が検討された。



写真 2.10.4 北沼駅構内の瓦礫撤去



写真 2.10.5 市川通り1号踏切

#### (2) 現地調査と復旧工事

震災発生日の深夜から翌日の3月12日にかけて八戸貨物駅～北沼駅区間の現地調査を行い、被災状況等を確認した。3月12日午後の第2回地震対策会議において詳しい被災状況が報告された。その結果、復旧作業にあたっては、「社員の

安全確保」と「早期の復旧」を目指し、3月17日から北沼駅構内の大量の瓦礫の撤去及び臨海鉄道線の軌道復旧工事が速やかに開始された（写真2.10.4、写真2.10.5）。

### (3) 荷主企業の被災と稼働状況

荷主企業の三菱製紙(株)八戸工場も、津波により電気系統や構内の軌道設備に甚大な被害があった。7機ある抄紙機は5月24日を皮切りに順次復旧稼働し、11月15日に全機が稼働した。

## 第3項 運転再開

### 1. 運転再開にあたっての安全確認等

臨海鉄道線の復旧にあたっては、試運転を2回に分けて実施し、それぞれの試運転で安全を確認した。

#### ①八戸貨物駅～北沼駅間（4月11日）

臨海鉄道線の軌道の復旧を確認するために単機で試運転を行った。その際、踏切に保安要員を配置し、機関車通過時に車両や人が侵入しないように、ロープを張り踏切を遮断して行われ、軌道の復旧状況等の安全を確認した（写真2.10.6、写真2.10.7）。



写真 2.10.6 試運転 4月11日



写真 2.10.7 試運転 4月11日



## ②八戸貨物駅～北沼駅間（5月13日）

踏切保安装置（踏切警報機、遮断機、信号機等）の復旧確認も含め、機関車にコンテナ車5両を連結して試運転列車を運転し、安全を確認した。関係踏切には、社員、警察官や復旧に係わる会社の方が立ち会い、踏切保安設備や信号機の作動状況について確認した（写真 2.10.8）。

## ③北沼駅（5月30日）

北沼駅の信号機及び継電盤も復旧し、臨海鉄道線は完全復旧を果たした。



写真 2.10.9 初出荷列車 6月2日

## 2. 運転再開

6月2日には初出荷となる貨物輸送が再開した。初出荷に際して、三菱製紙(株)による「安全運行祈願式」が実施され、製品を出荷する鉄道輸送の復旧を祝った。当面の間はコンテナ車5両による1日1往復で運転が続けられた（写真 2.10.9）。



写真 2.10.8 試運転 5月13日

## 第4項 得られた教訓と次なる災害への備え

今回の津波により被災した臨海鉄道線の2回にわたる試運転及び初出荷について、TV、新聞等で取り上げられた。「がんばろう八戸」のヘッドマークを付けて走る機関車の様子が何度も放映された。これは我々の鉄道の復旧が地域の復興の一助になっているという意味で取り上げられたと考えている。今後もさらに安全安定輸送に努めていくこととする。

また、全社一丸となって復旧に取り組むことの大切さを改めて確認した。

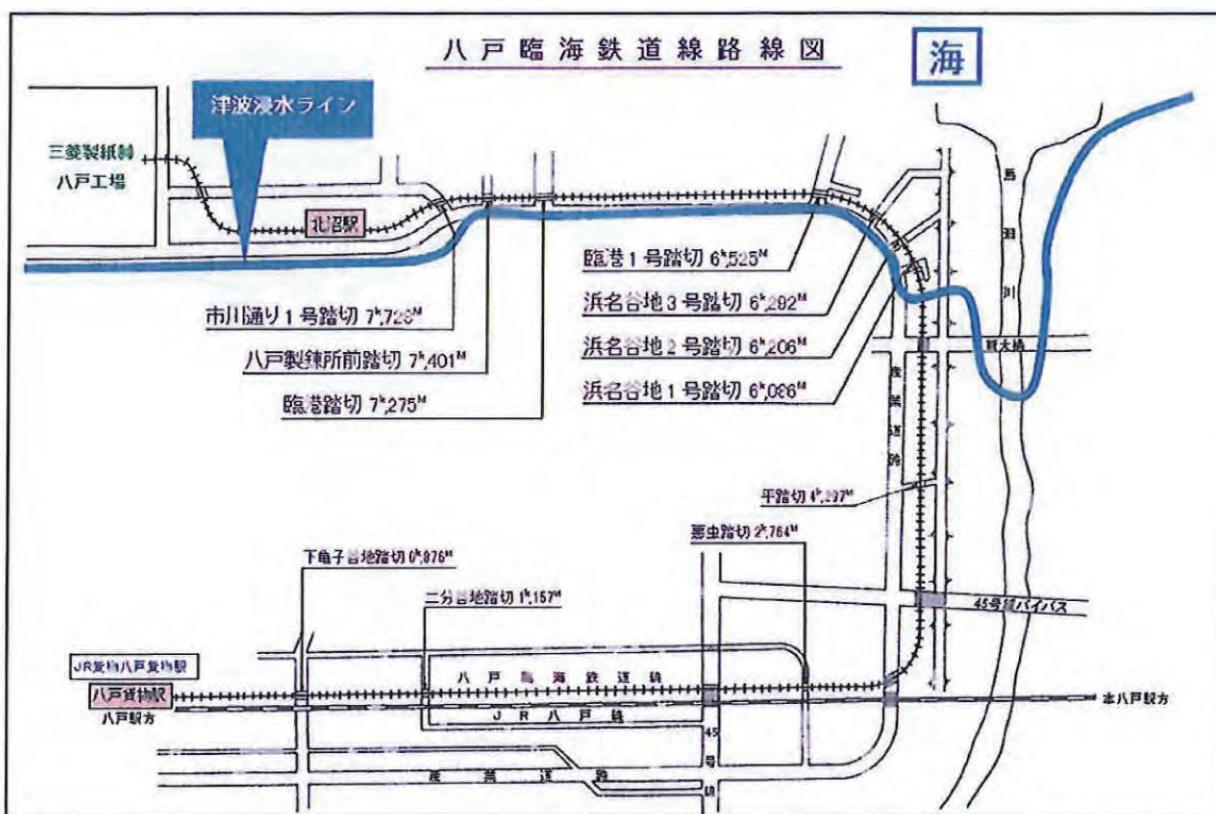


図 2.10.1 八戸臨海鉄道の路線図と津波被災状況

## コラム①

### CM大賞作品で八戸臨海鉄道の 復旧状況が取り上げられる

八戸臨海鉄道(株) 下田 正行

青森朝日放送（ABA）が主催して毎年実施している青森県内の各市町村がふるさとへの熱い思いを込めて、作品を競い合う2011年第11回「ふるさと自慢わがまちCM大賞」の審査発表会が平成23年11月27日に行われました。審査の結果、東日本大震災と、震災からの復興をテーマにした八戸市の「未来」が大賞を受賞しました。内容は、ビフォーアフター方式で被災の状況は白黒で、復旧の状況はカラーで、表現されています。作品の中に八戸臨海鉄道の復旧の様子も収められており、未曾有の被害から復興する八戸市が強く

遅しく描かれているものです。特に臨海鉄道の機関車の側面にプリントされたうみねこの次に、蕪島の上空にうみねこが舞い上がる画面が続き、あたかも機関車の、プリントされたうみねこが「未来」に向かって羽ばたく様とダブリ、会社としてもしっかりと復興を遂げなければならないという思いを強くした次第です。TVでは2012年末まで放映される予定になっています。会社のホームページにも掲載しておりますので、是非ご覧いただきたいと思います。

◎参考：バックミュージック 『目をつむれば』

作詞 井上英明 作曲 宮下浩司

唄 藤沢淑美



復旧前（八戸臨海鉄道）



復旧後（八戸臨海鉄道）

また、八戸臨海鉄道は会社創立40年史の発刊準備を進めておりましたが、完成間近の3月に東日本大震災に見舞われ、発刊がずれ込んでしまいました。しかし、東日本大震災の被災記録と復興状況を掲載することができ、貴重な記録を掲載することができました。

